一つぶ一つぶの愛じょう

八積小学校　四年　新保　歩都

ぼくのお母さんは、新がたでくらしているおばあちゃんと定期的に長電話をします。おばあちゃんとおじいちゃんの体調を聞いたり、育てている野菜やお米の成長具合の話や、ぼくの話などをするそうです。

この前、お母さんが電話を切った後、ぼくのところに来て、

「おばあちゃん達、来年はもうお米作らないかもしれない」って。

とぼくに言いました。

ぼくはそれを聞いて、思わずなみだがあふれてしまいました。生まれた時からずっと食べてきたおばあちゃん達のお米が、食べられなくなるかもしれないなんて、想ぞうしただけで悲しくなってしまったからです。

でもお母さんから、お米を作れなくなる理由を聞いてなっとくしました。おじいちゃんが八十さいで、おばあちゃんは七十五さいに

なります。おじいちゃんはひざを悪くしていて、おばあちゃんは生まれつき体が弱いので、一年を通して手間とろう力がかかる米作りをこれ以上続けるのはきびしいそうです。

できることなら、ぼくも手伝いたいけれど、千葉から新がたまではとても遠いので、ぼくだけで手伝いに行くこともできないし、ぼくはまだ小学生なので、役に立てることもほんのちょっとです。何もできない自分がくやしいし、大好きなおばあちゃん達の役に立てなくて、もうしわけない気持ちになりました。

でも、この前の電話の後、ぼくのこの気持ちを、お母さんがおばあちゃんに伝えると、「歩都がそんな風に思っていてくれるだけでうれしいよ。ばあちゃん達が作ったお米を歩都がおいしく食べて、元気でいてくれることをねがって、作っているんだからね。」とおばあちゃんが言ってくれていたそうです。

今まで、朝ごはんからおタはんまで、必ず出ていたおばあちゃん達のお米が、いつか食

べられなくなることを知り、お米に対して考えがかわりました。ぼくは、おばあちゃん達からお米を通して、愛じょうを受け取っていたんだと深く気づきました。

おばあちゃん達に感しゃして、今、ぼくにできることをしようと思います。それは、これまでのようにおいしくお米をいただくことです。ぼくはまだ一人前じゃないので、直せつ手伝うことがむずかしいけれど、お米を一つぶ一つぶ大事に食べて、元気に運動したり、勉強したりして、りっぱな大人になることが、おばあちゃん達へのぼくの愛じょう表げんになると思うからです。

いっぱいいっぱいごはんを食べて、早く大きくなって、おばあちゃん達に今までのおんがえしがしたいです。

おばあちゃん、おじいちゃん、いつまでも元気でいてください。

そして、いつもおいしいお米をありがとう。